

F. W. パーカーの地理学習論

—その「基礎論」の探究—

高田 喜久司*

(平成 27 年 10 月 30 日受理)

F.W. Parker's Theory of Geography Learning

—Research of the "basics theory"—

Kikuji TAKADA*

The main purpose of this article is to research F.W. Parker's "basic theory" of geography learning. My conclusions are as follows ; First, in Parker, the science of geography is the real inception, the true beginning of the study of all natural sciences. The geography had a character integrating natural science and humanities, as a mother of sciences. Therefore geography is defined as "the earth's surface" and "its habitant" by a wide sense.

Second, the geography presents knowledge of life. The knowledge of life comprehends all knowledge, and therefore the study of life comprehends all studies. Educational value of geography learning is at this point.

Third, the purpose of geography learning is to develop mental power and thought power. An approach of activism was taken to realize this purpose. This approach is Pestalozzian—Ritter method.

Fourth, in Parker, introduction of the geography subject was a central subject to unify subjects. This idea is a pioneer of the current "Sougo gakushu".

Key words: geography learning, Pestalozzian-Ritter method, mental power and thought power, structural geography, activity approach.

1. はじめに—本稿の意図

パーカー (Parker, F. W., 1837—1902) は、ペスタロッチ (Pestalozzi, J. H., 1746—1827)、ヘルバルト (Herbart, J. F., 1776—1841)、フレーベル (Froebel, F. W., 1782—1852) などの近代教育思想を根本精神においてとらえ、最善の特徴を反映した理論を発展させている。その理論の多くは、彼の手によって生き生きとした形で実際の教室へ導入され、進歩主義教育の教育的信条となって結実をみたのである。パーカーが「進歩主義教育運動の父」と称されるゆえんである。彼が活躍した 19 世紀後半は、量的に普及・整備されつつあった公立普通学校 (common school) を人間性重視の教育において実質的に向上させること、さらに顕在化した伝統的教授法の欠陥や矛盾をいかに克服するかなど、教育課題が山積してい

* 教職課程 (建築学科) 教授

たのである。パーカーはこうした課題に果敢に取り組み、アメリカ教育史上に不滅の功績を残している。

19世紀後半、アメリカの初等教育界においてパーカーは、カリキュラムの豊富化、實際化に寄与し、牢獄のような教室を子どもにとって魅力のある楽しい活動の場所としたことは、高く評価されなければならない。実際、彼は初等教育の教科として、伝統的な 3R's に終始することなく、内容教科や表現教科、具体的には地理、歴史、音楽、工作、図画、裁縫などを導入することに熱心であった。特に、パーカーは地理学習には力を入れた。彼は、地理学を、すべての自然科学の真の発端と位置づけ、地理学こそ子どもたちの心に合理的な精神が養われるという教育的価値を認識していたからにほかならない。

ドイツ留学から帰った彼は、ドイツ的な地理学習法のペスタロッチ＝リッター (Pestalozzian-Ritter) 的方法をアメリカに紹介した。それはドイツの地理学者リッター (Ritter, K., 1779-1859) がペスタロッチの直観主義的方法を地理学習に適用した地理学習論のことである。これらを学問的な背景として、パーカーは現代的な彼独自の地理学習論の基礎を築いていったのである。

まず、彼は地理学習の目的を知的能力 (mental power) の啓培、科学的な思考力 (thought power) の育成、発展にあるとした。そして、この観点から従来の地理問答式の注入的教授を極力排除することに努めた。こうした目的論に支えられた彼のカリキュラム構造もユニークなものであった。元来、地理教科の導入は、パーカーにあって単なる付加としての性格をもつものではなく、諸教科の統合・相関させる中心教科として位置づけられている点で、独自の評価が与えられている。3R's ですら独立教科として分離して教えられることなく、むしろ地理の内容の一部として教えられたことは注目されよう。すなわち、地理には読むこと、話すこと、書くこと、数えること、綴ること、構成すること、描くこと、歌うこと、型取ることなどが必然的に含まれているのである。

また、地理学習の方法は、端的に言って、活動主義的アプローチを強調したものであり、直観主義的、経験主義的なものであった。直接、自然と親しむ中で、子どもの感覚や直観力に訴え、同時に経験を豊かにすることを意図しながら、知識を獲得しつつ思考力を養うという原則に立つものであった。

本小論では、これまで素描したことを全般的に確かめながら、パーカー教育思想の骨子を構成する地理学習論が奈辺にあったか、の理解を得ることを意図したものである。ところで、パーカーの地理学習論を論ずるに先立って、基本的な文献について概観しておきたい。彼の諸著作のなかには必ず地理学習についての論究がなされている。この事実から判断して、各教科の学習指導論のなかで地理学習の占める位置の重要性を示唆しているといえよう。『教授講話』 (Notes of Talks on Teaching, 1883) は、序論のあと、読み方、綴り方、書き方、作文、数、地理、歴史、試験、学校管理、道徳訓練という内容構成となっており、とりわけ地理には4章のスペースを割いていることに留意しなければならない。ここでの所論をより深めたものが、『地理学習法』 (How to Study Geography, 1889) である。この著書は地理学習全般について述べられている。特に、地理学習の内容や方法についての実際的な手引書としての性格を有しながらも、当時としては斬新な問題提起をした

ものといえよう。また、1894年に公刊された『教育学講話』(Talks on Pedagogics)では、「中心統合理論の概要」(an outline of theory of concentration)という副題が示すように、地理を中心とする自然諸科学による統合理論がより精緻な形で論述されている。彼の中心統合理論がヘルバルトに依拠しながらも、それらをフレーベル的な児童観において包括しようとした点に特色がみられる。

したがって、本稿においては地理学習論上のパーカーの系譜や19世紀後半の地理学習の実際、パーカーの地理学習の性格や教育的価値・目的を含む基礎的な理論について、トータルに探究することを目的とする。

2. 地理学習論上のパーカーの位置

(1) パーカーの地理への関心

パーカーが地理に重点をおくのはどのような理由によるものであろうか。第1は、当時の初等教育において公認された唯一の内容教科が地理であった⁽¹⁾という歴史的な事情によるものであった。第2には、彼自身の興味に由来するものであり、地理はパーカーの「お気に入り」(favorite)の教科であった⁽²⁾、と指摘されていることである。

確かに、パーカーの地理への関心は幼少時からその萌芽がみられ、それは徒弟奉公(apprenticeship)としてウィリアム・ムーア家の農場での生活にさかのぼることができる。「丘や谷、小川を観察することによって、地理学を研究することができた⁽³⁾」と言うように、彼にとって農場はいながらにして、地理、地質、植物、動物、気象などあらゆる学習の機会を与えてくれたのである。まさに、農場は彼の「興味のセンター」だったといえよう。後年、パーカーは次のように述懐している。

「農場は立派な学校であり、研究という言葉は書物による学習だけを意味するものではない。それは家庭外の人間的な接触にかけているだけだ⁽⁴⁾。

「人口稠密都市における最もよく教授された学校は、教育的価値において、よき農場における生活とは決して同等ではあり得ない⁽⁵⁾。

こうした述懐は、農村生活にみられる優れた人間形成的意義をパーカーが察知していたことによるものであろう。そのため、彼は教科書による古い学習を信用することなく、しだいに自然研究(nature study)や科学に信頼を抱きながら教育活動を続けていくのである。たとえば、オハイオ州のディトン師範学校長時代(1869—1872)には、彼は好んで地理の示範授業や地理学習法に関する講話をおこなっている。マサチューセッツ州のクインシー教育長時代(1875—1880)には、野外観察を基本とし、そこで見たものをスケッチしたり、粘土や砂台で模型を作らせるような地理学習の改革をおこなったことは、その確証となる。

(2) ペスタロッチ=リッター的地理学習論

このような興味や関心によって、実際に地理学習法の改革を断行したのであるが、それでは地理学習論上でパーカーはどのように位置づけられているのであろうか。

パーカー自身、これについて『教授講話』のなかで、「注意深い観察と一般化をおこなったフンボルト、地理学という科学を発見したリッター、そしてリッターの生徒であり弟子であるギョーは、普通学校における地理学をわれわれのために作った⁽⁶⁾」と言及し、近代における地理学習論上の系譜を明らかにしている。

【フンボルトの自然科学的観察の方法】

自然地理学の祖と言われるフンボルト (Humboldt, A, von, 1769-1817) は、「地球の個々の現象が互いに連関して成る一有機体であること⁽⁷⁾」を理解しなければならない、という立場に立つ。すなわち、フンボルトの思想のなかには地球を1つの分離できない有機体として直観し、すべての部分は互いに関連し、依存し合っている統一体として考える理念が一貫しているのである。例えば、人類が土地、気候、植物に依存し、いかに植物界が物理的、化学的な諸現象に左右されているか、またこのような無機的諸現象自体が、いかに互いに依存し合っているかを明らかにしていった。こうして、地球表面における自然と人文の無限の変化を究め、それを調和的統一としてとらえることによって、地理学に1つの学問的根拠を与えた点で、彼の功績が認められるのである。これは従来の地理学が百科全書的な知識の蓄積をおこなうという古い型をもった学問の弊風に反省を促したともいえよう。

また、大旅行家でもあるフンボルトは、自然界のすべての事象に対する注意深い観察者として、ヨーロッパ、アジア、北アメリカの諸州や南アメリカをあまねく踏査し、観察に身を投ずることによって、研究の足跡を残している。フンボルトがおこなった旅行における自然科学的観察の方法は、地理学のほとんどすべての部門において、彼によって基礎づけられたのである。両アメリカの熱帯山地で、異なる海拔高度での気温を測定して、同一気温の地点を結び、初めて等温線を引くことを着想したのはその好例である。

フンボルトの学問の特徴は、経験的であり帰納的方法を用いていること、その意味で種々の現象が綿密な野外観察に基づいて、経験的な知識が積み上げられている点に求めることもできる。彼の最も重要な著作は、『宇宙』(Cosmos) 4巻(1845-1858)である。諸現象の相互関係を観察によって明らかにし、それをさらに包括する宇宙が自然法則によって内的に調和した全体であると考えた点が、彼の「Cosmos」を貫く精神である。

しかし、この著書は純粋に学問的な性質をもつものであり、教育のためという目標を掲げたものではなかった。これに反して、直接的にはドイツ地理教育界に対するリッターの影響は、フンボルトよりも大きかったといわれている。

【自然観察を重視するリッター】

人文地理学の祖といわれるリッターは1784年、汎愛派の教育思想家の一人であるザルツ

マン (Salzmann, C. G., 1744—1811) が、シュネッペンタールの田園に開校した汎愛学院 (Philanthropinum) の第一期生として5人の子どもとともに入学した。この学院はルソー (Rousseau, J. J., 1712—1778) やペスタロッチの教育理論に則って教育をおこなうことを意図し、教材は有用なもの、つまり生活に必要なものが強調された。また、観察力を鋭敏にし、判断力を強め、真理への愛を喚起し、自己活動を促進させることに方法上の主眼がおかれた。

リッターの地理の担当教師は、後にドイツ体操の創始者といわれたグーツムーツ (Gutsmuths, J. C. F.) であった。彼は地球に関する知識は、遠足や旅行によって、自然を直接的に観察することによって得られるものと考えていた。リッターはグーツムーツの指導によって、美しいチューリングゲンの森や草原、湖沼、牧場などを野外観察することによって、地理への興味が高められていったのである。

【リッターとペスタロッチとの邂逅】

そして、なによりも注目すべきは、ペスタロッチとの邂逅によるものであろう。リッターは1807年、家庭教師をしていた2人の少年と一緒にフランクフルトからフランス、スイス、イタリアの各地を旅行した。その時、当時イヴェルドン (Yverdon) にいたペスタロッチを訪れ、一週間ほど滞在し、深い感銘を覚えたのである。ドイツに帰ったリッターは、そこでさらにフンボルトに接して大きな感化を受けた。彼は「ある種の飢えきった食欲で、彼の著作を食い尽くした⁽⁸⁾」と言われている。そして、2年後再びイヴェルドンを訪れ、ペスタロッチの教育方法と実践に通暁するようになった。その時、彼はペスタロッチの印象について、次のように述べている。

「ペスタロッチは小学校の子どもほどには地理学については知っていない。しかし、それにもかかわらず、私は彼から地理学を学んだ。私は彼に傾聴することによって、自然的方法の直覚を私の内部に呼びさまされたのである。彼は私に方法を教えた」⁽⁹⁾。

概して、19世紀の内容教科の発展にペスタロッチの教育方法が与えた影響はきわめて大きかったと言われている。そして、この方法こそが、リッター地理学を建設するための研究方法論と合致するやり方だったのである。

かくして地理学においてはフンボルト、その教授法においてはペスタロッチからの影響が顕著であったリッターは、地理学を子どもに学ばせる場合、いかにすれば最も効果的に、また興味深く子どもが学習できるかという問題に、新しい解決を求めようとしたのである。その結果得られた結論は、次のようなものであった。

「街であれ、村であれ、谷間であれ、子どもは最初の地理の知識を部屋の中や地図の上や書物から得ているのではない。子どもはそれを自然の中で獲得するのだ。このことは常に正しい。こうした初歩的方法は学問や方法論のすべての要求にかなうものであり、それゆえに唯一の方法ともいえるべきものである。ここで子どもは土地をあらゆる関連した姿において、他の国々の地図をも理解するのである。こうした基本的な教養が完全に授けられた後には、地理学の教授の際に提供する多くの困難は、すべて解消するであろう」⁽¹⁰⁾。

【リッターの「地人相関論」】

リッターは自然と人間が深い関連をもっていることを強く認識し、人間を土地との関連において取り扱うことを要請している。すなわち、自然科学的学問と人文科学的学問とを連結する学問として地理学を建設しようとしたのである。それは「地人相関論」とも呼ばれ、その成果は全20巻2万頁にも及ぶ、通称『一般比較地理学』（1822-1859）として結実をみる。これによって従来のまったく混沌としていた地理学を科学の水準にまで引きあげる貢献をしたのである。

リッターは1819年ベルリン大学の地理学教授となって40年間、その職にあった。そして19世紀後半の有名な地理学者は直接的にしろ間接的にしろ、リッターの学徒であったと言われている。例えば、ドイツのキーペルト（Kiepert, 1818-1899）、フランスのルクリュエ（Reclis, E., 1830-1905）⁽¹¹⁾、それにスイス生まれのアメリカ人地理学者ギョー（Guyot, A., 1807-1884）などはこの中に含まれる。パーカーはベルリン大学へ留学したとき、リッターはすでに没していたが、リッターの遺風を受け継いだと考えられるキーペルトのもとで、2年半にわたって研究を続けたのである⁽¹²⁾。

フンボルトにしろ、リッターにしろ野外観察を重視し、さらに自然の統一性という概念、すなわち自然のあらゆる個々の事象が相互に関連し合っていると考えるところにおいて共通性を有していた。自然界の諸現象を学習するのは、この結合と統一とを確かめるものだったといえよう。二人にとって自然の統一は、無機物と有機物、人間でないものと人間、物質と物質でないものを包含するものであった。どの一部分であろうと、それを取り除くことは不合理であるばかりか、全体の結合と統一を壊すことを意味したのである。

この点についてはパーカーも例外ではない。しだいに明らかにしていくが、彼の次のような言葉は、それを如実に物語っているのである。

「実際には人間と自然というすべてを包含した2つの教科があるに過ぎない。地理学はこれら2つの教科を統一する。一つの教科は他の教科を説明する。自然なくして人間は存在しない。人間なしの自然は無用である」⁽¹³⁾。

【ギョーと初等地理教育】

これまで論究してきたことを概括するならば、パーカーが地理学習論上ではペスタロッチとリッターのラインに位置付いていることは否めないのである。さらにアメリカ合衆国において、ペスタロッチ=リッター的地理学に大きな影響を与えたのは、パーカーが指摘したようにギョーである。ギョーはスイスに生まれ、リッターのもとで4年間研究し、1848年マサチューセッツ州にやってきたのである。ギョーについて、リッターの伝記作家であるゲージ（Gage）は、次のように述べている。

「地理学の分野において、最も成功し同時に最も顕著なリッターの後継者は、ギョー教授である」⁽¹⁴⁾。

ギョーはマサチューセッツ州教育委員会の視学官と講習会講師として採用された。その後 1854 年にはプリンストン大学で地質学と地理学の教授となって活躍する。しかし、初等地理教育への関心を棄てきれず、1866 年挿絵入りの教科書『地理学教授』(geographical teaching)を公刊した。この教科書についてパーカーは次のように評している。

「リッターの生徒で弟子であるギョーは、公立普通学校の地理学をわれわれにとって比類のないものにした。しかし、この書物は失敗に終わり今では絶版になっている。その理由は古い方法で教授された教師は、その偉大なる善さ (beauty) を理解することができなかったからである」⁽¹⁵⁾。

【パーカーの地理学習の改革】

ギョーの書物は確かに成功を収めることはなかったが、当時使用されていた教科書と比べても遜色がないばかりでなく、それ以上のものだったといわれている。パーカーもこの教科書から学んだという。このギョーの仕事のあとを受けて地理学習の改革を展開したが、ほかならぬパーカーであった。1889 年『地理学習法』を公刊したパーカーは、この書物について、「リッターとギョーの原理と計画を適用する地理学習の方法と工夫の実際的な記述である⁽¹⁶⁾」と述べている。『地理学習法』によって、今や地理は教育課程において重要な内容教科としての地位を得るようになったのである。

結局、パーカーの地理学習論の系譜はフンボルトと、特にペスタロッチからの影響が顕著なリッターを頭目として、ギョーの線を考えてみるのが可能である。ペスタロッチ＝リッター的方法といわれるのはそのためであろう。

【ペスタロッチ＝リッター的方法】

では、ペスタロッチ＝リッター的方法とは何か、次のように整理しておきたい⁽¹⁷⁾。

- ① 地理学習は自然地理を基礎として総合的に進むこと。
- ② 地理的自然現象と人間との関係、特に土地と住民との関係に留意すること。
- ③ なるべく直観教授によっておこない、あまり微細な地図は用いないこと。
- ④ 子どもを自発的に活動させ、常に部分と全体との関係に留意させること。
- ⑤ 生徒に数学的な割合によって、大小、遠近を比較させよ。
- ⑥ 先験的な理論からの演繹ではなく、帰納的な、調査による経験的な科学として地理学を考えていること。

20 世紀初頭の優秀な地理学教師は、パーカーの薫陶を受けた人だといわれているが、その代表者として次のような人物を挙げることができる。すなわち、イリノイ州シカゴ近郊にあるクック郡師範学校 (Cook County Normal School, 校長はパーカー) の教壇に立ったことのあるフライ (Frye, A., 1859-1936)、ハーバード大学出身でピッツバーク・ハイスクールで総合的な「自然学習」(Nature Study)を構想したジャックマン (Jackman, W. S., 1855-1907)、さらにはレドウェー (Redway, 1849-1942) やジャックマンの「自然学習」を

発展させたベイリー (Bailey, L. H., 1858-1954) 等が、パーカーの伝統にたちながらも、それを継承、発展させていったのである。

(3) 19 世紀後半の地理学習の実際

アメリカ社会全体の産業上、経済上の著しい発展を背景にして、読・書・算の 3R's にとどまらず、新しい教育内容が要求されはじめたのは南北戦争後であった。その結果、教材過剰現象、拙劣な教授法によって、当時の学校教育の現状は、極めて深刻なものになっていたのである。ラッグ (Rugg, H.) によって「『教育』と『学校に通うこと』とは同義語である⁽¹⁸⁾」と評されたのは 1890 年代の学校である。その教育内容は、「教科目や教科書に盛り込まれた知識—文字や記号—に関するもの⁽¹⁹⁾」であった。

したがって、当時の学校生活は子どもたちが自由に活動し、会話をすることは絶対に許されない状態にあった。いわんや学校全体を自由に利用したり、学校周辺の社会的、自然的環境を有効に活用するような教育の発想は、一般の学校にはあまり見られなかったのである。1820 年代からしだいに、初等教育のカリキュラムに地理が加えられるようになってきた。しかし、その教授法は、子どもの身のまわりの事実、事象を観察することによってはじめられたペスタロッチやリッターが唱えたものとは異質のものであった。まさに、パーカーが言うように、「言語記憶によって、無関係の事実の集積体 (conglomerate) の学習⁽²⁰⁾」となっていたのである。

そして、この頃の地理教科書は全く旧式で、いわゆる「辞書的=百科全書的な地理学」(dictionary-encyclopedic geography) と称されるものであった⁽²¹⁾。それは百科事典のなかに見られるようなタイプの莫大な情報を含んだ教科書であった。あたかも地理教科書は、地球上に存在するすべての事実を包含することができるかのように考えられていたのである。その多くは、土地や種々の国民の習慣や世界各地における珍しい自然現象に関するまとまりのない事実から成っていた。しかもこれらの事実は相互に関連がなく、バラバラのまま提示されたのである。そして子どもたちはそれらの事実や定義を暗記することが強要された。

この頃、広く使用されていた地理教科書の一つにドワイト (Dwight, N.) の『地理体系』(System of Geography) がある。その 1 節に「フランス」について述べているが、これは次のような学習法であった。19 世紀後半の地理学習の一典型例として、その実際を紹介しよう⁽²²⁾。

問 フランスの位置及び面積はどうか。

答 それは北緯 42 度と 51 度の間にあり、かつ西経 5 度東経 8 度の間に位置する。南 600 マイル、東西 500 マイルである。

問 フランスの境界はどこか。

答 北はイギリス海峡およびオランダをもって限られ、東はドイツ、スイス、イタリアに接し、南は地中海およびピレネー山脈、西はビスケー湾によって限られている。

問 フランスの管轄区域はどこか。

答 かつては21州、後に83県に分かれる。

問 フランスの国名は何に起源するか。

答 自由人 (Free man) を意味するドイツ語に由来する。

これはまさに地理問答であって、子どもたちはこれを暗記し、教師は子どもが暗記したところを自分の前で反唱させてどの程度暗記したかを点検するのみであった。このやり方は少なくとも19世紀の中頃まで、いかなる大多数の学校にあっては、さらにずっと後まで続いた学習法だったという⁽²³⁾。

パーカーの地理学習法の改革は、地理問答式で注入的な地理学習法の欠陥や矛盾をいかに克服するかを反省・検討することによっておこなわれたのである。

3. 地理学習の基礎論

(1) 地理学の教育的価値

パーカーにおいて、学校教育における支配的地位を占めるものは地理学習であった。そしてその学習方法は戸外の観察や各種の作業を重視するという性質のものである。それは中世以来の伝統的な学習方法とは異なり、面目を一新するようなものだったといわれている。それではパーカーは地理学にどのような教育的価値を見出していたのであろうか。

パーカーにとって、「教育は人間の完全な発達の条件を提供するもの⁽²⁴⁾」であった。そのため、「人間が何を必要としているかについての知識」と、「それらの必要を満たす人間の活動」を発見しなければならないことになる。なぜなら、これらの知識や活動が「人間の全面的な発達 (all-sided development) の欠くべからざる手段⁽²⁵⁾」であるからである。

このような観点から、まず、与えられるべき知識が選択されなければならない。その際、パーカーは最も重要な知識として、「生活に関する知識」を選択した。すなわち、生活についての知識はすべての知識を包括し、それゆえに生活についての学習は、すべての学習を包括することになるからである。地理学はまさに、「生活の物質的な基礎、つまり生活の基本的な条件であり、それを説明するもの、そして生活のための物質的な準備となるものについて研究する⁽²⁶⁾」科学である。したがって地理学は、生活がそこに根をおろしている環境についての科学であり、それは生活の存立条件、それを成り立たせている最高の法則を理解させてくれるがゆえに、高い教育的価値があると考えるのである。

次に、彼は『地理学習法』の序論で、「地理学はすべての科学へ向かって開かれた戸口である」と言い、さらに次のように述べ、生活についての研究の重要性を敷衍している。

「歴史および文学とともに初等理科 (elementary sciences) が普通学校コースの初めから終わりまでを通じて本質的な要素となる日が、徐々に近づきつつある。賢明で思慮深い教師たちはやがて十分な考慮の末に、孤立した綴り字、技巧的な文法、計算などをする学習の一部を割いて生活を直接的に研究し、そして生活の準備をする学習に席を与えるであろう。読み方、綴り方、文法、描くことなどは自然のうちにある神意 (design) の学習 (=

自然科学の学習)への直接の手段として最もよく教えることができるということがしだいに分かってくるであろう」⁽²⁷⁾。

これは従来の学校教育が、読み・書き、文法・計算などの道具教科の学習に終始していたのに対して、内容教科として生活の研究の重要性を説いたものである。さらに進んで道具的な知識は内容的な知識のための手段として、関連させながら学ぶことを期待しているのである。この期待はやがて「生活教育」あるいは「総合学習」へと発展する画期的な陳述を含むものと言ってよかろう。

かくして地理学は生活の知識を提供し、さらに自然科学と人文科学とを統合するものとしての価値を有していたのである。しかし、こうした高い教育的価値をもっている地理学ではあるが、現実にはハリス(Harris, W. T., 1835-1909)が次に指摘するように、その価値についての認識が一般には薄かったのである。

「地理は文化の基礎として、非常に重要なものであるが、他のどの教科にもまして悪い学習法の横行が、啓発された教師たちを悩ませてきた。単なる地誌(topography)の断片的な事項が記憶され、地球の表面のさまざまな差異や特徴を生み出している土地や水や空気のプロセスが無視されてきた。近年、地理の学習に実際的な改革がなされたのが、リッターやルクリュー、ギヨー及びその弟子たちの努力にもかかわらず、この地学的な過程(earthprocess)が単なる地誌に置き換えられたと言うことはできない」⁽²⁸⁾。

つまり、地理の「力学」についての学習が欠けているのであり、この地理学習の欠陥を批正し、現状を打開する意味でパーカーは多くの貢献をしたのである。

(2) 地理学の性格

パーカーの地理学についての定義は、3著書の随所にみられるが、その内容についてはほぼ一貫した態度で論じられていると言ってよかろう。

彼はまず「地理学は地球の表面およびその住民の記述である⁽²⁹⁾」(a description of the surface of the earth and its habitants)と包括的に定義する。そして、この定義は徹底的に健全で真実なものである⁽³⁰⁾と、自信をもって述べている。そして、包括的な定義をさらに二つに分けている点に注目しなければならない。一つは、「地球の表面についての記述」であり、もう一つは「その住民についての記述」である。

前者は純粋地理学あるいは「構造地理学」(structural geography)と称され、われわれが住んでいる地球の構造の知識について学習することを目的とする。そしてパーカーは、「もしわれわれがこの定義のもとに、地球の表面の上または下に働いている諸力を含めるならば—物理学、化学、地学、鉱物学などの領域に踏み込むことになる⁽³¹⁾」と考えていたのである。したがって、地理学習に関する論議は、地球の表面についての記述に集中しなければならないことになる。しかし、この記述はこれまでの地理学習においては全く見逃されてきたものであるとパーカーは言う。

これに反して後者すなわち「その住民の記述」という部分は、人類学や民俗学や歴史学など、それ自体が1つの科学であるところのものを含んでいるのである。

これらを比喩的に表現すれば、「地球の表面の記述」は舞台 (stage) であり、「住民の記述」は舞台上で演ずる演技者 (actors) と位置づけられる⁽³²⁾。ここに至って、地理学はいわゆる「地と人」との相関形態であるという見解に達するのである。この相関形態はリッター地理学と全く類似することになる。

このように考えると、パーカーの地理学は、広義には物理学、化学、地学、鉱物学、人類学、民俗学、歴史学を包含するとして性格づけることが可能である。換言すれば、リッターと同様、パーカーにあっても、地理学は諸科学の母であり、自然科学と人文科学とを統合するという性格を有することになる。パーカーが「地理の科学は、すべての自然科学の学習の真の発端であり、真の導入である⁽³³⁾」と説くのは、理由のないことではない。パーカーの地理学の定義は、「地球の表面の現在の様相についての知識ないし科学」であった⁽³⁴⁾。したがって地理学を知ることが、現在の地球の表面の様相を知ることになる。この定義はまた、ひとつの教科としての位置を地理学にあたえ、その結果その他の教科に対する関係を示すものである。つまり、ここで地理学をめぐる諸科学の統一のあり方を探究してみることが必要であろう⁽³⁵⁾。

【諸科学の統一のあり方】

まず、地質学 (geology) は、地理学との関係において、地球の表面の様相の歴史と定義する。現在の地理学は、この地球表面の無数の異なった形態や様相のうち、現在の様相を示すものである。それゆえに、地質学と地理学の統一は必然的に求められ、それは原因に対する結果の関係を明らかにするものである。すなわち、地理学は地質学が示す歴史の中に1つの様相を示すものであって、結果 (すなわち地理学) は原因 (地質学) についての学習なしには決して正しく学ばれ得ないことになる。逆に、地質学の学習は地理学の学習にとって絶対に必要なものである。

次に、鉱物学 (mineralogy) の地質学に対する関係は、事物の運動に対する関係である。鉱物学は岩石の材質についての研究であり、地質学は岩石の質の変化の研究ということになる。これらの変化のあり方 (地質学) は、主として岩石そのものの性質 (鉱物学) によって決定される。木材や煉瓦、鉄材や石についての研究が建築物の構成の研究に不可欠であるように、鉱物についての科学は、地質についての科学と関係する。そして、建築材料についての研究が、完成した構造物の研究に対するように、鉱物学についての研究は地理学と関連する。こうして、地理学が鉱物学の学習なしには学ばれ得ないことも理解できるのである。かくして、地理学、地質学、鉱物学の3つの科学は有機的に統一されることになる。

そして、自然界の諸事実は絶えず変化し運動していることは自明の理である。山は隆起し、不断に働くエネルギーによって風化している。ここで変化と運動に関する二つの重要な科学が存在するのである。岩石や水や空気中のきわめて微細な変化についての科学が化学 (chemistry) であり、物理学 (physics) は運動についての科学である。地理学、地質学、鉱物学の研究は、化学と物理学との協力が得られなければ、十分な成果を得ることは

できない。

さらに、空気や水や岩石を通して作用し、これらに物理的な生命をあたえるエネルギーである熱に関する科学は、気象学 (meteorology) である。それは、日光の分配についての科学だということもできよう。気象学は空気と水蒸気のなかに現わされる物理的、化学的な現象を取り扱う。また地質学の要点は、異なった岩石を生み出す原因となった気象条件を発見することである。結局、空気と水の地表形成における効果の追究 (地理学) は、気象学、地質学、物理学、そして化学を、知識の経済的な獲得という点で分離できないものにする。これらの諸科学は、元来、一つの科学ではあるが、無機物に関する科学として統一されている。無機科学は物質に作用し、それを変化させる諸力についての科学である。

【無機科学と有機科学との関連】

無機科学は、有機物ないし生活についての諸科学とも密接に関連づけられている。すなわち、無機科学は生命ある有機体の物質的な基礎、その維持や栄養についての研究を提供する。鉱物、空気、水などは生活の物質的な基礎としての材料であり、また生命を維持し、養育するものである。

他方、有機科学の研究は、下等な生物についての科学である植物学 (botany) から複雑な形式である動物学 (zoology) へと進み、さらにより高度に発達した生活の形式をもつ人間の研究へと発展していく。人間の研究は人類学 (anthropology) と呼ばれ、それは人種学 (ethnology) に基礎づけられる。人種学は広い意味で歴史を含み、歴史は人間の精神的な闘争の記録であるから、真理探究の最高の形式とされる。物理学と化学が無機化学の運動・変化を代表しているように、歴史は精神的な変化を代表するものと考えられているのである。

このようにして、無機科学は有機科学と結合してより有効に研究され、逆に有機科学は有機体や有機体の生活が、四囲の風土や気候によって差異があるように、無機科学との結合によってより完全なものとなるのである。

パーカーは無機科学と有機科学を含めて広義の地理学とし、それは諸科学を有機的、統一的、相互依存的なまとまりをもつものとして学ぶ。これはあたかも、自然界が分離されていないように、それと調和する地理学は、お互いに分離しては学習され得ない性格をもつものとして規定されたのである。こうした立場はすでに触れたように、リッターの考え方と基本的には同じものといえる。

(3) 地理学習の目的

これまで明らかにしたように、本来の地理は、「地球の表面の記述」であった。パーカーはそれに「構造地理学」の名称をあたえた。構造地理学について、彼は次のように言う。「すべての科学は構造地理学の直接的な成果である。そして構造地理学は初等科学 (elementary science) と呼ばれ、すべての科学はその上に基礎づけられる。これまでこ

のような部門は全体的に見過ごされたり、無視されてきたのである。実際、私はこの新しい科学に新しい名前、すなわち構造地理学と名付けるように強制してきたのである⁽³⁶⁾。

構造地理学は、時には elementary science ないし、primary geography、あるいは elementary geography と呼称されたりもする。しかし、これらの名称はいずれも同義語として使用されていると解せられ、内容的な差異はないと考えてよいようである。

そして、パーカーは構造地理学についての知識は、すべての地理的知識の不可欠の基礎であって、この知識なしには地理の科学は不可能であるという考えをもっていた。それゆえに、地理学習の目標は、「子どもの心の中に地球の表面に関するひとつの概念を発達させること⁽³⁷⁾」であり、構造地理学を学習する目的は、「地球の表面についての概観的な、または著しく特徴的な状態に対応した、ひとつの概念または心像 (mental picture) を獲得すること⁽³⁸⁾」であった。

ところで従来の地理学習は、子どもの心に何ら実際上の関係をもたないような地図の表面の記述からはじめられた。この地図だけを頼りとする学習は、「地球の表面」についての正確な概念を得させることができないと、パーカーは反省を促すのである。すなわち、地球が完全なる球であるならば、地球の表面についての記述は、きわめて簡単ではあるが、実際にある場所を想起することは難しいし、ほとんど不可能に等しいのである。表面は混沌として不規則であることが普通である。そこで、地球上の位置関係の記憶をあいまいで形式的なものにしてしまわない方策が重要になってくる。その解決方策は、パーカーにあっては「斜面」 (slope) という概念を導入することであった。彼は、次のように言う。

「地理学を学ぶ者にもたらされる最初の美しい真理は、全地球の表面が斜面から成り、それは生き物ではないが、あたかも生命のための組織のようにできているということである。地球の表面はいくつかの長くて広い傾斜した面に分けられる。これらの大きな傾斜は、低い方の端に集まって大きな凹みを作っており、そのなかに大洋がたたえられている。一方、高い方の端に集まっている傾斜は、大陸と呼ばれる大きな隆起した土地の塊を形成している」⁽³⁹⁾。

すなわち、地球の表面を平面的に把握させるのではなく、斜面という概念を導入することによって立体化を図ろうとしたところに、パーカーにおける地理学習論の特色があるといえよう。こうした研究は、前述したように従来の地理の学習において見逃されていたのである。つまるところ、構造地理学あるいは地理学は、「大陸の構造と一致する概念を形成することである。構造の概念、すなわち高度、斜面とは関係なしには真の地理学を学習することはできない。地理学マイナス構造は、平面あるいは平原、すなわち純粋な真理にはならない⁽⁴⁰⁾」ということになる。そして、具体的には、「もし、私があなた方が見てきた家を記述するように請うたなら、あなた方は即座にその家の心像にあなた方の精神を集中するであろう。家の高さや屋根や一般的な形、ドア、窓などについて私に告げるであろう。まさにこのような方向で、大陸の構造が記述されるであろうし、記述されねばならない」⁽⁴¹⁾。

それゆえに、初等地理学はなによりも「われわれのまわりにある地球の表面の形態を徹底的かつ慎重に観察することにある⁽⁴²⁾」という前提に立つ。この前提から地理学習は、一

例として次のように展開されるのである。

「あなた方のまわりにある形状(forms)からはじめなさい、すなわち、丘、谷、平地、海岸線、泉、小川、池、湖、島、半島などを徹底的かつ慎重に学習することである。植物学や動物学の対象も同様である。子どもたちを野原や谷へ連れ出さなさい。そして、教室に戻ってきて、子どもたちが見てきたことを口頭で書かせなさい。次に、型取り、描かせなさい。最後に事象について書かせなさい。実際に測定することによって距離を教えよ。雨が降ったあとで水の流れを教えよ。泉を見つけさせなさい。そして、水はどのようにして地中から生ずるかを発見させなさい。いろいろな土の種類—砂利、砂、粘土、ロームなどをもってこさせよ。その際、地理学習には具体的な表現、言語表現を、『絶えず』使用するようになさい」⁽⁴³⁾。

これらの展開はすでに素描した 19 世紀後半の地理学習の実際とは著しく様相を異にすることは明らかである。こうしたプロセスを繰り返しながら、パーカーは地理学習によって科学的な思考力(thought power)の啓培・育成することを力説したのである。そしてその見地から注入的な教授法を極力排除して、自己活動的な学習法を強調したと言ってよい。結局、パーカーの地理学習の究極的な目的は「知的能力」(mental power)、あるいは「科学的思考力」の発展にあり、その目的を果たすためには何よりも子ども自らを自覚的に活動させ、自ら思考させることに重点をおいたのである。これがパーカーの地理学習論のアルファであり、オメガだったといえよう。

4. おわりに—まとめと今後の課題

パーカー地理学習論の系譜、地理学習の基本的な性格や教育的価値、目的論など基礎的な理論について探究してきた。彼の教育思想の中核と考えられる地理学習論は、膨大かつ多岐にわたっているため、本小論ではその輪郭の一端を素描するにとどまってしまったといっても過言ではない。ただ、彼の所論について、できる限り今日的意義を前面に押し出そうと努力してきたが、重要な論点を見落とし、瑣末な点を誇大視する結果になっているのではないかと危惧する。この点については今後の解決課題としておき、これまで論じてきたことを断片的ながら整理し結びとしたい。

①なによりもパーカーの学習論は、彼の教育思想の中心的な位置を占めるものであること。したがって、ここで素描した中に発見される真理の多くは、学習指導論一般にも適用できる性格をもっているといってもよい。

②パーカーの地理学習論の系譜は、注意深い野外観察と一般化の重要性を指摘したフンボルト、特にペスタロッチからの影響が強い「地人相関論」者であるリッターを頭目として、初等地理学習への強い関心を示したギョー、さらにはルクリューらの線を考えてみるができる。いわゆる、ペスタロッチ＝リッター的地理学習法と称されるものであった。それは端的に言って、子どもの自己活動を根幹とした活動主義的で経験主義的アプローチをとるものである。

③地理学は生活についての知識を提供するものであった。それは人間の必要を満たし、人

間の全面的な発達に不可欠の手段として選択された知識である。そのため、生活についての知識はすべての知識を包含し、生活について学習することは、すべての学習を包括することになる。この点にパーカーは、地理学習の教育的価値を見出したのである。

④地理学はすべての科学の真の発端であり導入であると考えられていたこと。パーカーの地理学は広義には、物理学、化学、生物学、地学、鉱物学、人類学、歴史学などを含むものであり、それは諸科学の母として、「地人相関」、さらには無機科学と有機科学との結合、自然科学と人文科学を総合するという性格を有するものであった。

⑤地球の表面を平面的に把握させるのではなく、「斜面」(slope)という概念を導入することによって立体化を図ろうと専心努力した「構造地理学」の構想は、パーカー地理学の特色を示すものであった。

⑥パーカーの地理学習の目的は、知的能力、あるいは科学的思考力を育成することであり、その目的を果たすために、子どもを自発的に活動させ、自ら思考させることに重点を置いたのである。

⑦当然のことながら、地理教科の導入はパーカーにあつて、個別のかつ単なる付加として位置づけられるものではなく、諸教科を統合、相関させる中心教科として重要視されている点で、今日的に、評価することができる。まさに総合学習の原初的、パイオニア的な形態を意味する点で特筆されるのである。

こうした基礎論を背景にして、地理学習の内容をどのように構成し、具体的に実践を展開したかの探究が、次の課題となる。

注

- (1) 梅根悟著『初等理科教授の革新』明治図書、1977、114頁。
- (2) Marler, Jr. C. D. : Colonel Francis Wayland Parker: Prophet of the "New Education" (unpublished) 1965. p. 159.
- (3), (4) Campbell, J. K. : Colonel Francis Wayland Parker—The Children's Crusader (Teachers College Press) 1967, p. 9.
- (5) Curti, M. : The Social Ideas of American Educators, 1959, p. 376.
- (6) Parker, F. W. : Notes of Talks on Teaching, 1885, p. 125
- (7) 篠原助市著『理科教授原論』東洋図書、昭和12年。3頁。
- (8) ハーツホーン著 野村正七訳『地理学方法論—地理学の性格』朝倉書店、昭和32年、41頁。なお、フンボルトやリッターを理解するために、次の資料を参考にしたことを付記しておく。
 - ・飯塚浩二著『人文地理学説史』日本評論新社、昭和30年。
 - ・飯塚浩二著『人文地理学』有斐閣、昭和28年。
 - ・村松繁樹他著『人文地理学入門』ミネルヴァ書房、昭和29年。
 - ・木内信蔵他編『地理学総論』朝倉書店、昭和43年。
 - ・小林望他著『現代地理学の課題』学文社、昭和47年。

- ・山崎準二「ディースターヴェーク地理教授論」『東京大学教育学部紀要』1978.
- (9) 岡田正章「リッター」『教育人名辞典』理想社、昭和37年、717頁。ならびに、Parker, S. C. : The History of Modern Elementary Education, p. 347. 参照。
- (10) 梅根悟著：前掲書、117頁。
- (11) ルクリューについては直接触れることを避けたが、「リッターの弟子とその学風に従う者の中で、断然とびぬけて成功した人」（ハーツホーン著野村正七訳：前掲書 80頁）として位置づけられている。1851年よりリッターのもとで研究した彼は、人類の生活が自然より受ける影響を重視した地理思想を強調した。パーカーには間接的な影響を与えたと考えることができる。注(28)参照。
- (12) Parker, S. C., :op. cit., p. 343. なお、リッターのあとを受けてベルリン大学の地理学教授となったのがキーペルトであった。
- (13) Parker, F. W., :” An Account or the Work of the Cook County and Chicago Normal School from 1883—1899” *The Elementary School Teacher and Course of Study*, Vol. 2 No. 10 June 1903 p. 767.
- (14) Parker, S. C. :op. cit. p. 348.
- (15) Parker, F. W. : Notes of Talks on Teaching, (Kellog & Co.) 1883. p. 125.
- (16) Parker, S. C. : op. cit. p. 348
- (17) ①～⑤は岡田正章：前掲書 717頁。⑥は小林望他著：前掲書 39頁による。
- (18) Rugg, H. : Foundations for American Education, 1947. p. 523.
- (19) Rugg, H. :op. cit., p. 524. ラッグは当時最善の学校の一つとしてパーカーの学校をあげている。
- (20) Parker, F. W. :op. cit., p. 125.
- (21) Paker, S. C. :op. cit., p. 341.
- (22), (23) Cubberley, E. P., :Public Education in the United States, 1934, p. 298.
- (24), (25) Parker, F. W., :How to Study Geography, (D. Appleton and Company) 1889. p. xvii.
- (26) Parker, F. W., op. cit. p. xix.
- (27) Parker. F. W., op. cit. p. xxix.
- (28) Parker. F. W., op. cit. p. vii. なお、『地理学習法』はハリスの編集による「国際教育叢書」の第10巻として出版されたものである。この引用は、Editor's prefaceからとったことを付記しておきたい。
- (29) Parker, F. W., op. cit., p. xxi. なお、これと同じことは、Parker, F. W. :Notes of Talks on Teaching, p. 120. にもみられる。
- (30), (31) Parker, F. W., How to Study Geography, p. xxi.
- (32) Parker, F. W., :Notes of Talks on Teaching, p. 120.
- (33) Parker, F. W., :How to Study Geography, p. xxix.
- (34) Parker, F. W., :Notes of Talks on Pedagogics — An Outline of the Theory of Concentration (Kellog & Co.) 1894. p. 27.

- (35) 本項の以下の叙述は、Parker, F. W., :How to Study Geography, pp. 27-42 の所論を筆者なりにまとめたものである。
- (36) Parker, F. W., :Notes of Talks on Teaching, p. 125.
- (37) Parker, F. W., :How to Study Geography, p. xxi-xxii.
- (38) Ibid. : p. xxvi.
- (39) Ibid. : p. xxii-xxiii.
- (40) Ibid. : p. 95.
- (41) Parker, F. W., :Notes of Talks on Teaching, p. 121.
- (42) Ibid. : p. 127.
- (43) Ibid. : p. 128.

主要参考文献

- ①梅根悟著『初等理科教授の革新』明治図書、1977.
- ②高田喜久司「フランシス・W・パーカー－学校改革の先駆者」（市村尚久編『現代に生きる教育思想－アメリカ－』ぎょうせい、1981、所収）.
- ③高田喜久司「パーカーの教育実践とデューイ」、『日本デューイ学会紀要、第28号』1987. pp. 141-147.
- ④高田喜久司「パーカー教授学の哲学的背景－その点描－」、『日本デューイ学会、第29号』1988. pp. 110-116.
- ⑤高田喜久司「F. W. パーカー教授学の実践的観点－Quincy Method の解明－」、教育方法研究会『教育方法学研究、第14集』、2001. pp. 63-83.
- ⑥高田喜久司「F. W. パーカーの児童観」、教育方法研究会『教育方法学研究、第16集』2009. pp. 1-23.